

臨床心理士におけるセクシュアリティ理解と援助スキル開発に関する研究

研究分担者：松高 由佳（広島文教女子大学人間科学部）

研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部）

研究協力者：喜花 伸子（広島大学病院エイズ医療対策室）

内野 悌司（広島大学保健管理センター）

研究要旨

本研究は、MSM の HIV 予防介入に寄与するため、心理支援の専門家（臨床心理士）のセクシュアリティ理解と援助スキル開発のための効果的研修プログラムの開発を目的とし、1 年目は臨床心理士の教育研修上の課題を明らかにするための質問紙の開発（予備調査）、2 年目は1 年目で開発した質問紙を用いて若者の支援に従事する大学の学生相談現場の臨床心理士を対象とした実態調査を行った。3 年目は研修プログラムを開発、実施し、効果評価と今後の課題を検討した。

【1 年目】学生相談経験のある臨床心理士 5 名への面接調査（予備調査 1）を行い、現場の臨床心理士がセクシュアリティの支援について課題と感ずることやサポートのニーズなどが明らかとなった。これらの知見をもとに質問紙の予備調査版を作成し、臨床心理士養成課程の大学院生 45 名を対象とした質問紙調査（予備調査 2）を実施した。その結果、現状では専門養成課程でセクシュアリティの教育はほとんど行われておらず、同性愛の心理的支援に関心が寄せられていないことが明らかとなった。作成した質問紙は、知識など臨床心理士のセクシュアリティ理解の実情を捉えるのに有効であると考えられた。

【2 年目】中四国・近畿地方の大学で学生相談業務に従事する臨床心理士（または「大学カウンセラー」有資格者）484 名を対象に無記名自記式質問紙調査を行い、321 名（66.3%）の有効回答数を得た。大学院の専門養成課程で同性愛の教育を受けた割合は 12.8%と低率であった。臨床的な関わりや性同一性障害との区別に関する知識は不十分で、MSM における HIV 感染の問題についての認識も普及していないことが判明し、教育的介入の重要性が高いことが明らかとなった。事例を通じた実践的な研修の機会のニーズが高いことも示唆された。

【3 年目】セクシュアリティ理解と援助スキル開発を目的とした研修会を実施し、参加した臨床心理士を対象に比較群付き前後比較試験を実施した。介入群 25 名、待機群 24 名の対象者を分析した結果、セクシュアリティの知識や理解、MSM のセックスや HIV の相談対応への自己効力感を全般的に向上させることに成功し、多様な性に関する価値観の気付きも促進されたことが明らかとなった。一方、性的指向と性自認の区別など、一部の対象者では効果が継続しなかった点も明らかとなり、今後の課題として情報伝達のさらなる工夫や教育研修体制の拡充が重要であることが示唆された。

A . 研究目的

MSM (Men who have sex with men) にお

いて、社会的偏見などによるメンタルヘルス悪化の問題と HIV 感染リスク行動との関連が明

らかとなっており、心理支援の専門家（臨床心理士）がセックスや HIV の相談も含め MSM への支援を適切に行えるようになることが HIV 感染予防の観点から重要である。しかし、これまでにわが国では臨床心理士のセクシュアリティ理解や教育経験の具体的な実態を把握した研究はみられない。

【1 年目】実態解明に迫る調査を実施する準備段階として、予備調査が必要と考えた。そこで、学生相談経験のある臨床心理士への面接調査（予備調査 1）臨床心理士養成課程の大学院生を対象とした質問紙調査（予備調査 2）を行い臨床心理士のセクシュアリティ理解や、同性愛・性同一性障害について教育を受けた経験を明らかにするための質問紙の開発を目的とする。

【2 年目】臨床心理士のセクシュアリティ理解や教育を受けた経験、男性同性愛のケース担当への態度などの実態を把握し、教育研修上の課題を明確にするため、臨床心理士を対象とした質問紙調査を行う。性行動が活発になる青年期の心理的支援に従事する大学の学生相談の臨床心理士を対象とする。

【3 年目】2 年目で明らかとなった実態と教育研修上の課題に基づき、HIV 感染予防に寄与するための臨床心理士のセクシュアリティ理解と援助スキル向上のための研修プログラムを開発し、その効果評価を行うとともに、今後の課題を検討する。

B . 研究方法

【1 年目】

予備調査 1 では、機縁法によりリクルートした A 県内の学生相談に従事する臨床心理士 5 名を対象とし、それぞれ 1 回の半構造化面接を行った。調査項目は、大学院の養成課程やその他でセクシュアルマイノリティに関して心理臨床の教育、訓練を受けた経験や得られた知識やケース経験について、今後、セクシュアルマイノリティのケースを担当することについて思うこと等であった。得られた語りはグラウンディッ

ドセオリーの手法を参考にカテゴリー分析を行った。予備調査 2 では、某大学の臨床心理士養成コース（第 1 種指定校）の大学院生、在籍数 45 名を対象に、集合調査法で無記名の質問紙調査を実施した。調査項目は、同性愛・性同一性障害の知識・理解、大学院およびそれ以外で同性愛・性同一性障害の教育を受けた経験、同性愛男性のケースを担当することについての意識などであった。

【2 年目】

中四国・近畿地方の 4 年制大学で学生相談業務に従事する臨床心理士（または「大学カウンセラー」の資格を持つ者）に無記名自記式質問紙調査を行った。文部科学省ホームページのリストをもとに上記 2 地方の大学に 1 校ずつ電話やメールで連絡を取り、本研究の調査対象となる学生相談担当者があるかどうかや、その人数を確認した。確認が取れた大学のうち質問紙送付の同意が得られた学生相談機関に、質問紙を送付した（中四国地方 128 名、近畿地方 356 名、合計 484 名分）。質問紙の構成は、昨年度行った予備調査結果から、同性愛・性同一性障害の知識・理解や、HIV や検査に関する知識、専門的教育を受けた経験の有無、自己学習経験、学生相談でのセクシュアルマイノリティのケース経験の有無などを問う項目とした。研究実施にあたっては研究分担者所属機関の倫理審査委員会の承認を受けた。

【3 年目】

中四国（広島）近畿地方（大阪）の 2 か所の研修会に応募した臨床心理士を対象とした。大学の学生相談室宛てに研修会と研究協力依頼を記したチラシを送り、各府・県の臨床心理士会ホームページで広報し研究参加者を募った。

比較群付前後比較試験により介入の効果を分析した。具体的には、日程的に先に開催される広島会場（9 月 22 日）の参加者を介入群、その約 1 週間後に開催の大阪会場（9 月 28 日）の参加者を待機群と設定し、介入群は研修会約 1 か月前（「介入前」と、研修会直後（「介入後」）

に質問紙で測定した。待機群は、研修会約1か月前(「介入前A」と、介入群研修日～待機群研修会開催直前までの6日間に測定(「介入前B」)を行った。

その後、研修効果の持続性を検討するため、以下の測定を行った。まず、待機群に研修を実施し、その直後に測定を実施した(「待機介入後」)。さらに両群とも研修会の1か月後に測定を実施した(「1カ月後」)。

両群とも、研修会直後の測定までのすべてに回答した者には謝礼として2,000円のクオカードを渡した。

評価項目は各測定で共通であり、「セクシュアリティ知識」、「HIVの知識」(それぞれ、正答1点、非正答は0点として合計得点を算出)、MSMの陽性者への「支援態度」、セクシュアリティの心理的支援に関する「理解」、身近感・価値観などセクシュアルマイノリティへの「意識」、ゲイ男性のケース担当に対する「自己効力感」の尺度を用いた(それぞれ、得点が高いほど理解度が高いなどポジティブな方向を意味する)。その他、フェイス項目や自由記述で研修会の感想などを尋ねた。本研究は研究分担者所属機関の倫理審査委員会の承認を受け実施した。

研修内容は、2年目で明らかとなった教育上の課題に基づき、セクシュアルマイノリティとHIVの基礎知識、MSMにおけるHIV感染問題と心理職の関与が重要であることの意識付け、セクシュアルマイノリティの相談事例に基づく具体的な対応方法の検討(グループディスカッション)で構成した。

C. 研究結果

【1年目】

予備調査1では、対象者全員が大学院の臨床心理士養成課程でセクシュアリティの教育を受けた経験なし、研修で若干の情報を耳にしたことはあるが体系的な知識としてはほとんど定着していないことが明らかとなった。セクシュアルマイノリティのケースを担当した経験のある

対象者は2名であったが、ケースを実際に担当するまではセクシュアルマイノリティの心理的支援に関する意識そのものが空洞化しており、知識のなさのためセクシュアルマイノリティのケースを担当することに両価的であるという傾向がみられた。予備調査2では、37名の有効回答(82.2%)が得られた。知識に関しては「同性愛は病理」という誤った認識や見かけ上の偏見を有している割合は低かったが、性的指向という言葉を知っている割合も、その他の同性愛に関する項目の正答率は概して低かった。例えば、同性愛者のメンタルヘルスに関する項目では、わずか18.9%の正答率であった。また、「性同一性障害と同性愛の区別がよくわからない」に「そう思わない」と答えた割合が73%の一方、「同性愛になる主な背景の1つに性自認(自分を男だと思うか女だと思うか)の混乱がある」に「そう思う」または「わからない」と答えた割合は64.9%であった。このことから、同性愛の知識を持っているつもりで実は理解できていない者が多く含まれることが明らかとなった。

大学院で同性愛の教育を受けた経験については、97.5%つまりほぼ全員が「なし」と回答し、性同一性障害の教育を受けた経験がある者は37.8%であった。学部、大学院課程以外で、同性愛の心理臨床に関する自己学習経験について尋ねた項目では、約半数(18名)が何らかの自己学習を経験していたことが明らかとなった。その内訳(複数選択可)として最も多かったのは「インターネットで同性愛に関する情報を閲覧した」で10名、次に多かったのが「同性愛に関連する書籍を読んだ」で8名であった。同じく性同一性障害の自己学習経験の有無について尋ねた項目では、約半数(19名)が自己学習経験ありと答えた。その内訳(複数選択可)で最も多かったのは「性同一性障害に関する書籍を読んだ」で10名、次いで「性同一性障害に関連する情報をインターネットで閲覧した」が9名であった。

質問紙への意見(自由記述)では、自分がケ

ースを担当することへの意識を尋ねる項目に関して、「ケースの主訴について、セクシュアリティに関係ある悩みと想定されているのかどうか分かりにくいので回答しづらい」という意見が数件寄せられた。そのため、本調査用の質問紙には、この項目の部分に「セクシュアリティに関連することで悩んでいる」ということを示す文言を追加することを考えた。その他に、意味が分かりにくい点や回答しにくい点の指摘はみられなかった。

【2年目】

有効回答数は321名(66.3%)、平均年齢43.1歳(SD=11.0)、臨床経験平均13.8年(SD=9.4)であった。学生相談でゲイ男性の相談対応経験がある割合は21.6%、バイセクシュアル男性については6.3%であった。HIVや検査の知識項目では、「日本国籍の新規HIV感染者の約7割が男性間性的接触による」は正答率16.9%と低率、同性愛・性同一性障害の知識では「同性愛は精神的な病気」など非常に基本的な項目では正答率は約8割と高かったが、臨床的関わりに関する知識項目では、性同一性障害に関する正答率が76.6%に対し、同性愛に関する正答率は22.3%と低かった。大学院の専門養成課程で同性愛の教育を受けた割合は12.8%と低率であった。回答者の67.3%が同性愛の心理臨床に関する自己学習経験ありと回答した。

大学院で同性愛の教育を受けた経験の有無では、以下の項目で教育を受けた群の正答率が有意に高かった。「同性愛者/異性愛者になるかは本人の希望で選択できると思う」(63.4% vs. 44.3%、 $p<.05$)、「性同一性障害になる主な背景の一つに幼少期の親子関係がある」(78.0% vs. 50.6%、 $p<.01$)、「同性愛になる主な背景の一つに幼少期の親子関係がある」(57.5% vs. 35.3%、 $p<.01$)、しかし、それ以外の同性愛/性同一性障害知識関連項目では正答率に有意な差はみられなかった。

同性愛/性同一性障害の知識に関する項目へ

の回答と、同性愛に関する自己学習経験の有無との関連において、知識では以下の項目で有意差が見られ、いずれも自己学習経験あり群のほうが正答率が高かった。「同性愛は精神的な病気のひとつだと思う」(83.3% vs. 70.5%、 $p<.01$)、「男性同性愛者(ゲイ)の多くは、女性的な言葉やしぐさであるように思う」(90.7% vs. 74.3%、 $p<.001$)、「女性同性愛者(レズビアン)の多くは、男性的な言葉やしぐさであるように思う」(正答率94.9% vs. 78.1%、 $p<.001$)、「性同一性障害と同性愛の区別がよくわからない」(83.3% vs. 69.5%、 $p<.01$)、「性的指向とは、同性愛なのか、異性愛なのか、両性愛なのかを表す言葉である」(45.1% vs. 28.6%、 $p<.01$)、それ以外の項目では有意差はみられなかった。

男性同性愛/両性愛のケース担当への態度項目では、「セックスの話題が語られたら抵抗なく傾聴できる」に「あてはまらない・どちらかといえばあてはまらない」と回答した割合は32.7%、「HIVに感染したので相談したいと言われたらどう対応すればいいか不安」に「あてはまる・どちらかといえばあてはまる」と回答は50.7%であった。セクシュアリティに関して、事例検討や書籍による学習機会を今後利用したいと回答した割合は約8割にのぼった。自由記述でも学ぶ機会の充実を望む声が多かった。

【3年目】

研修会に出席し(1時間以上の遅刻早退者は除く)「介入後」/「介入前B」までのアンケートに回答した者は介入群で24名(85.7%)、待機群25名(75.8%)であった。介入群の年齢 $M=39.0$ ($SD=8.9$)、経験年数 $M=10.5$ ($SD=8.9$)、待機群の年齢 $M=36.4$ ($SD=10.2$)、経験年数 $M=7.6$ ($SD=7.8$)であった。年齢や経験年数に群間で有意差はなかったが、身近に同性愛の知人友人がいる割合は、待機群のほうが高かった。

各従属変数(尺度合計得点)について、介入群と待機群における介入前後の得点変化量を比較した。その結果、すべての尺度で待機群より

介入群の変化量が有意に大きいことが示され、介入群のみ、知識や態度の有意な向上がみられた ($p<.001$)。

また、尺度の項目ごとの検討も行い、「セクシュアリティの知識」の 9 項目では介入群のみ、以下の 4 項目で介入後の正答率が有意に高くなった。「同性愛は治療や努力で異性愛に変えることができると思う」(64.0% vs. 96.0%, $p<.01$)、「性的指向とは、恋愛感情や性的な感情がどの性別に向くかを表す言葉である」(44.0% vs. 96.0%, $p<.001$)、「性同一性障害(以下、GID)と診断されたクライアント(以下、CL)に対し、CL が希望する性別での生活ができるよう関わることは適切である」(68.0% vs. 96.0%, $p<.05$)、「同性愛を治したいという主訴の CL に対し、同性愛を異性愛に変えようとする心理的介入を行うことは適切である」(20.0% vs. 80.0%, $p<.001$)、「HIV の知識」の 5 項目では、介入群のみ以下の 2 項目で介入前より介入後の正答率が有意に高かった。「通常の HIV の検査(迅速検査)では、感染後 2~3 日後に感染しているかどうか分かる」(64.0% vs. 96.0%, $p<.01$)、「日本国籍の新規 HIV 感染者の約 7 割が男性同性間性的接触による感染である」(16.0% vs. 96.0%, $p<.001$)、「支援態度」の 4 項目では、以下 2 項目において待機群より介入群の変化量が有意に大きく、いずれもポジティブな態度への変化が示された。「自分には、支援の要請があっても実行するのが難しい」($p<.05$)、「自分は、彼らへの支援を実行するつもりがある」($p<.05$)、「理解」の 4 項目では、全ての項目で待機群より介入群の変化量が有意に大きく ($p<.001$)、いずれも理解度が上がるという変化が示された。「意識」の 5 項目では、以下 2 項目において待機群より介入群の変化量が有意に大きく、いずれもポジティブな意識への変化が示された。「2. もしクライアントが同性愛だと知ったら戸惑うだろう」($p<.05$)、「5. 性に関する自分の価値観について探索する方法を知っている」($p<.001$)、「自己効力感」の 5 項目で

は、全ての項目で待機群より介入群の変化量が有意に大きく ($p<.01$ ~ $.05$)、いずれも自己効力感が上がるという変化が示された。

さらに、一カ月後の測定を用いて、効果の持続性の検討を行った。比較群がないため両群を合わせて、介入前・介入直後・一カ月後の測定時期による変化を統計的検定で比較した ($n=37$)。その結果、尺度得点合計では、知識、態度など全てにおいて効果の持続が確認された。また、尺度の項目別に介入効果の持続性を検討したところ、概ね効果の持続性は確認されたが、知識に関する項目「同性愛になる主な背景の一つに性自認の混乱がある」と「通常の HIV 検査(迅速検査)では、感染後 2~3 日後に感染しているかどうか分かる」では 1 か月後の効果の持続性が確認できなかった。

自由記述では、MSM をとりまく心理社会的状況の課題と HIV 感染問題への認識、およびそれらをふまえた心理職としての支援の重要性について、また支援のネットワークの広がりを望む声がみられた。また、1 回の研修だけでなくその後も継続的に学んでいくことの重要性や必要性を感じたことが示唆された。研修後の 1 か月間に生じた自身の変化についての記述では、セクシュアルマイノリティの存在を日ごろから意識する傾向や、自身のうちにある偏見への意識がより高まったという記述が大半を占めていたことが特徴的であった。

D. 考察

【1 年目】

2 つの予備調査の検討から、大学院生、さらには現場で働く臨床心理士においても、セクシュアリティに関し適切な教育を受けられる体制はまったく整っておらず、実際に把握している知識は不十分で、支援に関する意識も養われていないことが示唆された。同性愛の基本的知識を有している割合は概して低く、知識のなさからくる不安などのためにゲイ・バイセクシュアル男性のケースを担当することに両価的な態度

を有している可能性が示唆された。また、同性愛と性同一性障害とを混同しているにも関わらず両者を区別できていると誤って認識している者の割合が高いという問題が明らかとなり、今後臨床心理士への教育的介入を行う上で重要な点と考えられた。

臨床心理士の専門的養成課程である大学院ではセクシュアリティについて性同一性障害の教育に偏っており、MSM 支援に必要な教育が行きとどいていない現状があることから、卒後教育として自己学習のための環境の整備やツールの開発なども必要であると考えられた。

今日の臨床心理士においてセクシュアリティの心理的支援を行うことのできる準備は整っていない者が多いと考えられ、MSM 支援のための教育・研修体制充実の必要性が高いことが示された。ただし、これらの結果は、予備的な検討であり、より多くのサンプル数で学生相談現場の臨床心理士を対象とし、詳細な検討を行う必要がある。今回作成した質問紙は、知識など臨床心理士のセクシュアリティ理解の実情を捉えるのに概ね有効であると考えられたが、HIV 予防という観点からは、セックスの話題を扱うことへの態度や HIV の知識なども明らかにする必要があったと考えられた。2 年目の本調査ではこれらの項目を含めて調査を実施することを方針とした。

【2 年目】

大学の学生相談現場の臨床心理士を対象に、セクシュアリティや HIV の知識、理解、セックスや HIV に関する相談も含む心理的支援に対する態度などについて、わが国で初めて実態を詳細に明らかにした。さらに、得られた結果から臨床心理士のセクシュアリティ教育研修内容に関する課題を明らかにした。

セクシュアリティに関する教育は臨床心理士の専門養成課程でほとんど行われておらず、特に同性愛に関しては性同一性障害よりも教育を

受ける機会がさらに少ないことが明らかとなった。このため臨床心理士の多くが自己学習のみに頼らざるを得ないと考えられたが、知識の現状からは、同性愛に関するごく基本的な知識の浸透は比較的高率であったものの、臨床的な関わりに関する知識や、性同一性障害との区別に関する知識は不十分といえよう。また、MSM における HIV 感染の問題についての認識も普及していないと考えられた。

大学院で同性愛の教育を受けた経験や、自己学習の経験は、部分的に同性愛/性同一性障害の知識の向上と関連していたが、臨床的な対応を適切に行っていくには十分とはいえない。専門的教育課程にセクシュアリティのトピックスを盛り込む対策を考えていくことは重要であるが、まずは研修などを含めた卒後教育のための環境整備、ツールの開発等が急務であると考えられる。今後の自己学習を行うソースとして事例検討会が最も希望が高かったが、臨床的な知識が特に浸透していないことを考えると、事例検討を含めたより臨床的、実践的な知識の習得ができる研修プログラムを開発することが役立つであろう。自由記述からも、学ぶ機会への関心やニーズが高いことがうかがわれる。

また、知識だけではなく、セックスや HIV の相談を含む男性同性愛の相談対応に対する積極的な態度を向上させるための教育的介入を行っていく必要がある。まずは MSM の心理的支援や HIV 予防対策に関するニーズがあることについて、支援意識を芽生えさせることが重要である。そして、必要に応じて、連携機関や紹介先の情報を整備・普及させていくことも今後の重要な課題と考えた。

【3 年目】

本研修による心理の専門家への介入は、全体としてはセクシュアリティや HIV の知識および理解、支援態度や意識の向上、さらに MSM への相談対応の自己効力感を高めるといった期待どおりの効果をあげ、ある程度の持続性もほと

んどの評価項目で確認されたといえよう。

特に、セクシュアルマイノリティの心理臨床に関する意識（当事者の存在を身近に意識することや、価値観への気づき）については、介入後から1か月後に有意な上昇を認めていた。研修会が終了した後でも刺激となって対象者の中に残存し、その後も臨床場面で、あるいは日常生活においても意識の広がりや深まりをもたらす効果を持つことが示唆され、今後の支援体制の広がりを考えるうえでも、重要な成果であると考えた。事例を題材に、グループディスカッションを行った参加型のプログラムが含まれていたことが、この成果に寄与したのではないだろうか。

一方で、性的指向と性自認の区別は研修直後の効果や持続性に疑問が持たれた。また、迅速検査の知識については研修効果の持続が確認できなかったため、これらの点に関しては、さらなる情報伝達方法の工夫が必要であることが明らかとなった。具体的には、よくある誤解の例と適切な考え方をセットで提示すること、適切な考え方を持つことで、臨床的関わりのどのような部分に活かされるのかを提示するなどの方法が考えられる。

特に思春期、青年期の心理的支援に焦点をあて HIV や性行動の課題もふまえたセクシュアルマイノリティの研修会は全国でも例が少なく、本研究は教育研修の手法として重要な知見を提供した。たとえ本人から表明はされていなくとも、クライアントが MSM である可能性を日ごろから意識し対応できる心理士が増えれば、当事者がより安心して自分のセクシュアリティについて相談することにつながり、HIV 感染予防にも寄与することが期待できる。今後は、より詳細に研修会の効果を検討することで、さらに教育効果を確実なものにするような教育体制や教育ツールの整備および普及が課題である。

E . 結論

国内外の様々な研究が、セクシュアルマイノ

リティの若者（10~20 歳代）におけるメンタルヘルスの悪化を指摘しており、MSM におけるメンタルヘルスの悪化は HIV 感染リスク行動の要因である。このような状況を鑑み、本研究では特に若者の心理的支援を通じて HIV 感染予防に資する方策と課題を検討した。

臨床心理士の専門養成課程でセクシュアルマイノリティの基礎的知識、臨床的関わりに関する知識や、援助的で肯定的な支援態度を身につけるための教育はほとんど行われておらず、卒後教育体制の拡充は非常に重要であるといえよう。研修プログラムをパッケージ化し、各地の臨床心理士教育研修において普及させていくことや、教育的ツールの開発、普及が今後の課題であるが、本研究の成果がその一助となるであろう。

F . 研究発表

1. 論文発表

（和文）

- 1) 品川由佳・兒玉憲一・中岡千幸: 中国地方の大学院生・初心の臨床心理士のスーパーヴィジョン経験に関する研究, 広島大学心理学研究 10, 147-158, 2011.
- 2) 松高由佳: セクシュアリティに関する心理療法家のクリニカル・バイアス. 心理学研究の世紀 4 臨床心理学 (深田博己監, 岡本祐子・兒玉憲一編), ミネルヴァ書房, 169-179, 2012.
- 3) 佐々木掌子・平田俊明・金城理枝・長野香・梶谷奈生・石丸径一郎・松高由佳・角田洋隆・柘植道子・葛西真記子: アメリカ心理学会 (APA) 特別専門委員会における「性指向に関する適切な心理療法的対応」の報告書要約, 心理臨床学研究, 30, 763-773, 2012.
- 4) 松高由佳・日高庸晴: カウンセラーのセクシュアリティへの理解や教育を受けた経験に関する検討—面接調査を通じて—, 広島文教女子大学心理臨床研究, 3, 18-23, 2012.

- 5) 松高由佳・古谷野淳子・小楠真澄・橋本充代・本間隆之・山崎浩司・横山葉子・日高庸晴: Men who have Sex with Men (MSM) における HIV 感染予防行動を妨げる認知に関する検討, 日本エイズ学会誌 15(2), 134-140, 2013.
- 6) 松高由佳・長野香: ホルモン療法の医学的リスクに関する概要, トランスセクシュアル、トランスジェンダー、ジェンダーに非同調な人々のためのケア基準, 世界トランスジェンダー・ヘルス専門家協会 (WPATH), 第7版日本語版, 中塚幹也・東優子・佐々木掌子 (監訳), 2014 (印刷中).
- 7) 松高由佳: 援助職の「セクシュアリティ」についての価値観がセラピーに及ぼす影響, セクシュアル・マイノリティへの心理的援助, 針間克己・平田俊明 (編著), 岩崎学術出版, 印刷中, 2014.

2. 学会発表

(国内)

- 1) 松高由佳・日高庸晴. カウンセラーの同性愛・性同一性障害に関する理解や教育を受けた経験に関する予備的検討. 中国四国心理学会第68回大会. 2012年, 広島.
- 2) 松高由佳・古谷野淳子・小楠真澄・橋本充代・本間隆之・山崎浩司・横山葉子・日高庸晴. MSMにおけるセイファーセックスを妨げる認知のタイプに関する検討. 第26回日本エイズ学会学術集会・総会, 2012年, 横浜.
- 3) 松高由佳・日高庸晴: 学生相談カウンセラーにおける同性愛の相談に対する態度 - 同性愛の友人・知人の有無とケース対応経験との関連 -. 中国四国心理学会第69回大会, 2013年11月, 山口.
- 4) 松高由佳・喜花伸子・内野悌司・日高庸晴: カウンセラーの HIV に関する知識と相談対応への態度との関連—MSM を対象とした心理的支援の観点から. 第27回日本エイズ学会学術集会・総会, 2013年11月, 熊本.